給仕精神の高揚

堀　龍　惇

今回宗門多年の懸案であつた「祖廟中心制度」が確立し、祖道こゝに復古して法光いよ〳〵輝きを増したことは宗門の爲め、將たまた祖山の爲め、誠に慶祝に堪えない次第である。

然しながら、この祖廟中心の制度は先般の記念大慶典を以て終りを告げたのではない。唯その基礎が出來て、その第一歩を踏出したと言ふまでゞある。故に完成はこれからであつて、その使命は、將來の宗門を背負つて立つ諸君の雙肩にかゝつて居るものと言ふべきである。

今しばらく「祖廟中心」に就て「制度」と「精神」との兩方面から考へて見やう。

先づ制度の方面から言ふならば、今回祖廟中心制度の名によつて實現されたものは何であるかと言へば、唯一つ「法主即管長」の制度のみである。

固より「法主即管長」の制度は、祖廟中心制度に於ける基本的制度であつて、守塔の聖職にある法主が取りも直さず一宗統理の管長になるといふ、これは萬劫ゆるがす可ざる鐵則であるが、この

實現のみを以て直ちに、祖廟中心制度が完成したものゝ如く思推するは餘りにも淺慮であり、理想が無さすぎるものと言ふべきである。

そこで次の問題は何かと言へば、目下鋭意調査研究中であるが、「身延經濟の宗門への開放——換言すれば身延の宗門直營——」と言ふことである。

これは他の制度や規則と異り、直ちに宗門の消長隆夷に關する重大問題であつて、立法技術の上から言つても、實際經營の方法から言つても、容易ならざる難事業であつて、一つ誤れば、收拾すべからざる結果に陷るの恐れがあると同時に、その方法宜きを得たならば、宗門の經濟はこゝに一變して有力なものとなるのである。

よつて祖廟中心制度第二段の仕事として着手されてゐるのであるが、當局としては、身延山當局と愼重熟議し、調査の上にも調査を遂げ、研究の上にも研究を積み、宗門劃期的制度の樹立完成を期すべく、誠心誠意ひたすら佛祖の御加護を念じて事に當つて居る次第である。

續いては諸制度の改廢である。現在宗門に行はれてゐる諸制度は、明治初年以來、各門流合議制度時代の遺物がかなり尠くない。實例を擧げることは控えて置くが、これ等はいづれも過渡時代に於ける妥協的制度が多く、當然早晩改められねばならぬものである。況や祖廟中心制度の確立した今日に於ては猶更である。その他にもまだこの「祖廟中心制度」を名實俱に完璧ならしむべく、改

廢若しくは新設さるべきものが多々ある事と思ふ。これ等もまた速かに改め、徐々を要すべきものは時を俟つて之を改め、新設すべきものは愼重の研究を遂げて之を新設し、この劃期的制度を彌が上にも光輝あらしめ、祖風を顯揚して宗門の興隆發展を期したいと考へて居る。

是の如くして、内、宗門を擧げて悉く祖廟中心制度の完成を見たならば、今度は、外、他派日蓮門下の融合歸一を策せねばならない。

顯本と言ひ、富士門流と言ひ、將たまた不受不施流といふも、悉くこれ大聖人の御門下ならざるはない。

よし分立には相當の理由がありとするも、兄弟墻に鬩ぐことは決して祖意にかなふ所以ではない。惟ふに分立の理由は、感情や意見の衝突か、教義解釋の相違か、事に當つての態度の對立かであつて、祖師に對して叛旗を飜へしたものでは決してない。故に更に高所に立つて、祖師に還元するの雅量を持つたならば、必ずや門下の合流は絶對に不可能でない筈である。またそうなるべきが當然であると俱に、我々は進んでその機運を開くことを心掛けねばならぬ。

「祖廟」は單稱日蓮宗だけの祖廟ではない。祖師の流れを汲むもの悉くの祖廟である。既に富士門流に於ては、波木井氏と意見を異にして身延を去つたが、祖廟に奉仕し得ざるを哀み、富士門流歴代の墓は皆、身延の御廟へ向けて建て、ひそかに祖廟奉仕の衷情を披瀝して居ると言はれ、明治初

年、一宗一管長制の始めて布かれた時には、各派合流して管長を定め、單稱日蓮宗は大いに讓つて、越後本成寺（後の法華宗）の日琳上人を推擧した歴史を持ち、更に大正年代には、本多日生師、田中智學氏等が肝煎となつて八派の合流を策し、統一閣に講習會まで開いた事があるではないか。

出來ないのではない、爲さぬのである。それも畢竟「時」であらうが、世は正に全體主義、統制の時代となり、現に祖廟中心制度まで確立して時が來てゐるではないか。今正しく是れ其時である。蓋し祖廟中心制度は、門下各派が齊しく祖廟に歸嚮し、統合の實を擧げた時に始めて完璧を見たといふべきである。それまでは我等は決して苟安に心を許してはならない。

然し更に進んで考へるならば、大聖人の御理想は「四海歸妙」であり「事壇建立」である。僅かな現在の門下だけ一致する事が最後の目的ではない。世界中を妙法に歸依せしめ、世界中を擧げて祖師の教へを奉ずるやうにせなければならぬのである。故に進んでは祖廟をして單に現在の日蓮門下だけの祖廟にとゞめず、世界人類全體の歸依信仰の中心とまでせなければならぬのである。

他の宗教や宗旨は、個人教化を目的とし、對機說法を能としてゐるが、我が日蓮宗は、國を擧げ、世界を擧げ、人類を擧げて歸依せしめねばならぬ大理想、大信念、大誓願に生くるものである。これを忘れたならば日蓮門下でもなく、また日蓮宗の存在價値は無いと言つて宜い。

故に一應は門下が例外なく結束一致して祖廟に朝宗する事が、祖廟中心制度の完成であるが、再應進んでは、大聖人の雄大なる御理想を實現して、今日の祖廟をして、世界人類歸依信仰の中心とまでする事が、徹底した意味に於ての祖廟中心制度の完成と言ふべきである。

諸君及び、將來宗門を背負つて立つ後世者に絶大の期待をかくる所以實に茲に存するのである。

次に精神的方面を言ふならば、「祖廟中心の根本精神」は抑も何か。私は簡單に答へる。曰く「給仕の精神」即ちこれである。

そしてその「給仕の精神」の中には當然の要素として、最も深い「反省懺悔の心」と、最も熱烈なる「求道精進の努力」と、最も勝れたる「忍難堪苦の覺悟」と、最も弘き「慈悲救濟の誓願」とがなければならない。

私はかりに之を「給仕精神の四要素」と名ける。この四要素が一も缺けたならば、給仕精神の完全なる發揚は出來ないと同時に、謙虚なる給仕精神がなかつたならば、懺悔も、求道も、忍難も、求濟も出來ないもので、互ひに相表裏し、互ひに主伴となるべきものである。

まづ法華經に就て見やう。涌出品には釋尊が本化大士の德を讃えてかう言つて居られる。

「是の諸の大菩薩は、無數劫より來た佛の智慧を修習せり。……常に頭陀の事を行じて靜かなる所

を志樂し、大衆の憒鬧を捨てゝ所說多きを願はず、是の如き諸子等、我が道法を學習して、晝夜に常に精進す。佛道を求むるを以ての故に、娑婆世界の下方の宮中に在て住す。志念力堅固にして常に智慧を勤求し、種々の妙法を說て其心畏る所なし。」

また彌勒菩薩はかう言つてゐる。

「是の諸の菩薩等は、志固くして怯弱なく、無量却より來た、而も菩薩の道を行ぜり。難問答に巧みにして其心畏るゝ所なく、忍辱の心決定せり」

常に頭陀を行じ、大衆の憒鬧を捨てゝ所說多きを願はざるもの是れ深き反省懺悔の生活ではないか。晝夜に精進して佛道を求むるもの是れ强き求道精進の修行ではないか。忍辱の心決定して畏れなきもの是れ勝れたる忍難堪苦の實踐ではないか。志固くして怯弱なく菩薩の道を行じて種々に妙法を說くもの是れ弘き慈悲救濟の誓願ではないか。實に本化の大士は、この內德を具して本佛に仕へたのである。則ち「給仕精神」とは、この本化大士の具有せられし內德を我等の內德とし、本化大士の本佛に仕へし慇懃謙虛の精神に則らんとするものであつて、これ本化別頭の最高道德であり、本化獨特の生活規範であり、それが直ちに本化宗敎の眞面容なのである。

故に例を他にとるまでもなく、大聖人の御生活御生涯そのものが、この四要素を具足した、給仕精神の完全なる發揚だつたのである。

則ち建長五年の朝より弘安第五の夕べに至るまで、語默述作生涯を通じての常說法、これ慈悲救濟の誓願によるものではないか。四難具さに嘗めて撓まざるもの、これ忍難堪苦の實踐ではないか。日本第一の智者たらんと願して思ひを內外の典籍にひそめ、孜々として諸宗の淵底を探り佛意を究めんとせしもの是れ熱烈なる求道精進の修行ではないか。難に處しては過去の宿罪を滅すと觀せしもの、是れ深き反省懺悔の生活ではないか。

この四要素あつて始めて、あの身延の靜かなる生活、あの崇高なる本佛給仕の本領相を發輝することが出來たのである。

もつとも大聖人の御精神としては、弘通そのものがすでに、本佛への給仕には違ひないが、給仕生活としての本領を全面的に發輝したものは何と言つても身延に於ける九ヶ年の御生活であつた。

そして、身延に於ける大聖人の御心境を最もよく吐露して居らるゝのが有名な「身延山御書」であるが、その中に於て大聖人は、樂法梵志等の說話を藉り來つて求道の容易ならざる事を示し、御自身の實生活と思ひくらべ、筆を結んで「佛になる道は師に仕ふるに過ぎず」と仰せられた。大聖人の身延に於ける御生活は實に「師に仕る」の生活、卽ち「本佛給仕」の御生活だつたのである。誠に尊き極みと申すべきである。

されば、門下またこれにならうて祖師に仕え、六老僧はみづから耕して奉仕し、中山の日高上人

は具さに八役を勤めて千日給仕の素願を果し、滅後に及んでは老僧以下それ〴〵庵を結んで祖廟に仕え、輪次守塔の制廢されては身延山主が專らその聖職に任じ、現に朝夕勤經の折、また重大法要の節、法主みづから茶湯靈膳を供へ奉る儀の傳つてゐるのは、誠に深きいはれに依るものと言はねばならぬ。

尊いかな給仕の精神！――大聖人はすでにみづから實踐して範を示し、更に「成佛の直路たゞ師に仕るに在り」と仰せられた。

然しこの崇高なる精神は、一に深き反省懺悔と、熱烈なる求道の精神と、強き忍難の覺悟と、限りなき慈悲救濟の誓願とより發する事は前述の通りである。故に我等は深く内德を整え、而してこの精神を高揚することを心掛けねばならぬ。

そして、祖廟中心の根本精神は實にこの「給仕の精神」に基くものである事を識らねばならぬ。若し謬つて單なる政治的施設と思つたならば、これ淺識謗法であり、逆路伽耶陀である。

惟ふに精神は本であつて、制度は末である。卽ち「佛法は體の如く世間は影の如し」である。精神が正しく確立しなかつたならば百千の制度も畢竟徒勞で、やがて土崩瓦解しなければならない。この祖廟中心制度をして益々光輝あらしめ、進んで完璧を期する事は、一に擧宗一致、如何にこの精神にめざめ、如何にこの精神を高揚するかに在る。

我等固より駑駘に鞭ち、この精神を高揚に努めると同時に、一日も速かにその完璧を期する事に努力する覺悟でゐるが、然し實際問題として、前途には猶ほ幾多の困難があり、しかも、他派門下の合同から、進んで四海歸妙・事壇建立の曉を期するに至つては、前程頗る遼遠と言はねばならぬ。

切に次代の宗門を荷ふ諸君、及び將來後進の人々の、力强き自覺と、撓まざる努力とを期待し熱望してやまぬ次第である。

宗政復古に當り青年學徒の奮起を望む

柴田顕秀

桃栗三年柿八年と云ふから、植えた本人が必ず喰べ得るとは限らないが、その美しい果實は必ず緣ある者が頂戴するに違ひない。

本宗の先師先哲に依つて幾度か企劃され幾度か失敗に終つた祖廟中心制度が、事變下の本年を以